

台語の“是 si7”を用いた焦点表示構文の声調

Tonal Focus Phrasing of 是 si7 Constructions in Taiwanese

呉 幸芬

WU Hsing Feng

はじめに

台語では“是 si7”は普通話の“是 shi4”と同様の働きをする。統語論では常に特殊動詞として扱われ、繫辞 copula とも称される。これはおもに英語の「be」動詞と同じような働きをする。日本語で、「A は(が)B だ」、「A は B のだ」というように、トピックマーカ―「は / が」+「だ / である」という断定助動詞で表されているものと似ている。

このような“是 si7”は一般に判断・説明を表す本動詞であるとされているが、同じく動詞としての用法の中で、その他に焦点を表す時に強調する要素の直前に置くマーカ―としての用法もあると考えられる。本稿では、台語における“是 si7”という特殊動詞を中心として、文中での役割は繫辞か、または単に焦点を表すマーカ―としての用法である場合、それは代詞か助動詞に近い性質の機能をもつ品詞なのかを考察する。台語には変調現象があり、変調の単位として声調グループが定義できるが、構文中の“是 si7”の有無により焦点が当たる部分が異なる場合に、声調グループによる句切りがどのようになるかを考察していきたい。そのために、それぞれの例文を声調グループの句切りとともに表記し、構文において統語論的な結合と声調グループとはどんな関係があるか、どう変化するのかについて考察する。特に母語話者として強調の有無や句切りの有無の弁別があることを具体的な音声を検討する。

1. 日本語の名詞句繫辞文

「繫辞」の構文形成機能という枠組みで日本語と台語文型を具体的に比較する。

名詞句繫辞文

- (名詞句) (名詞句) ダ
- 1) 田中さんは 日本学科の学生 だ。
- (名詞句) (名詞句) ダ
- 2) 私は 日本人 だ。
- (名詞句) (名詞句) / ダ

3) あの本は 私 の だ。

以上の3例は全て繫辞で、主語と述語とを結合させる動詞である。即ち、「日本学科の学生だ」、「日本人だ」、「私のだ」の「だ」は述語化辞と見なすことができる。

例3の所有を表す格助詞「の」は名詞の意味を持つ場合であり、準体助詞とよばれることもある。日本語には「の」、「もの」、「こと」のような形式名詞が用いられ、連体修飾句とともに様々な意味を伝える。即ち、先行する連体句を名詞句相当にする機能がある。繫辞「だ」と結合して名詞述語となる。台語の“的 e5”と対応する機能を持つ語である。

4) あの本は 私が書いた(の/もの) だ。(あの本=の/もの)

5) あれは 昨日買った(の/もの) だ。(あれ =の/もの)

6) あれは ずるい(?の/やつ) だ。(あれ =の/やつ)

形式名詞「の」が「もの」や「やつ」と置き換えられるときは概ね動詞が修飾する名詞が指定されていない場合に用いられるものであり、主語と等しい関係だと考えられる。「の/もの」は強調されることがないが、修飾部に文の焦点がある。修飾される「もの」は、主語が普通は人間ではないことしか述べておらず、人間のときの「やつ」もどんな人間かを特定しているのは修飾部である。例6では「奴」=「もの」で、奴は「ずるいもの」という人を説明する。一方「ずるいのだ」は主語の人間性を指摘すると考えられる。これらは、「の」が名詞の代わりに現われて修飾部に焦点があることをあらかず述語化であると考えられるが、「のだ」にはそのような名詞句述語文と解釈しにくい例(例文6の「の」)もある。

台語“是 si7”が構文上の繫辞の機能を果たしている用例を示す。

7) NP 是 NP

{Tan5}-sian0-sinn0 {si7'-i1'-seng1}

陳先生 是醫生 <陳さんは医者です。>

「的」で終わる名詞句は、日本語の「の」と同じように、所有関係のほか、焦点をもつような修飾句を表す。

8) NP 是 NP 的(の/もの)

{Chit4'-tai5'-chhia1} {si7'-goa2'-e5}

這台車 (是)我的 <この車は私のだ。>

9) NP 是 VP 的(の/もの)

{Hi5 si7'-oah8-e0}

魚 是活 的 <魚は生きているものだ。>

台語では、動詞句も繫辞文の主語になる。「的」がある場合とない場合がある。

10) VP 是 NP

{Khau3} {si7' - i 1' -e5' -choan1' -tiong2}

哭 是 伊的 専長 <泣くという手業は彼の専門だ。>

11) VP 的是 NP

{Goa2' -sia2' - e5' -si7' - eng1' -bun5' - phoe1}

我 寫 的 是 英 文 批 <私が書いたのは英語の手紙だ。>

これに対して、14のような文では、主語となる名詞句がないため、繫辞文とは認めにくい。

12) 是 VP 的

{Cha4' -am3} {si7' -thau1' -chau2} -chhut0-lai0 {e5}

昨暗 (是) 偷走出來 的 <昨晩はこっそり出掛けたんだ。>

1.2. 名詞句繫辞文と考えられない「のだ」文

日本語「のだ」は、連語であり、準体助詞「の」と繫辞(助動詞)「だ」と結合して、原因や理由・根拠・対象などの説明を強く述べる機能をもつ。名詞句繫辞文と考えにくいのは、主語となる名詞句が見つげにくいからである。この場合、「の」の修飾部に焦点がある。

13) a. (彼女が その本を 書いた)のだ。(焦点— 修飾部全体)

b. (彼女が その本を 書いた)のだ。(焦点— 彼女)

c. (彼女が その本を 書いた)のだ。(焦点— その本)

14) a. 彼女は (その本を 書いた)のだ。(焦点— その本)

b. 彼女は (その本を 書いた)のだ。(焦点— 書いた)

助詞「は」を用いない場合、「のだ」の前にある何かが新しい情報を表す焦点であるが、それがどの部分であるかは発音によって区別される。「は」を用いる場合は、名詞句繫辞文と似てみえるが意味が異なり「の」を「もの」に置き換えられない。「は」を伴う名詞は焦点ではなく、これ以外の部分に焦点がある。

台語「是」を用いる文でも、12のように、主語が不明確で繫辞文と考えにくいもの(特に、是の後ろに名詞句をもつもの)では、是の後ろに焦点がある場合が多い。焦点と発音にはどんな関係があるだろうか。

2. 台語“是 si7”について

上述したように“是 si7”という特殊動詞は、文、フレーズ内での機能は台語と普通話では、

ほぼ同様の使い方をする。“是 si7”は基本的に動詞として扱われ、前後の2つ事物を結び、同等や、種類・帰属を表す。即ち、<主語+是+名詞>という形で、日本語では、「～は～だ」「～は～である」という意味に解釈され、英語の「be」動詞とほぼ同じような繋辞の働きをする。ほかに、存在（所在）や対比などを表す本動詞としての役割がある。また、相手の意見を肯定して、回答・返事の形で、「是 si7・是是 si7' -si7・是是是 si7' -si7' - si7。」 - 「そうである・その通りだ」という意味も持っている。又、“是 si7”が繋辞や本動詞として用いられると、省略できない。他にも様々な用法があり、構文中での特徴は、以下のようによまとめることにした。

<一般動詞と共通の特徴>

- ・ 一般動詞のように否定の場合は“是 si7”の直前に“(m̄ / 毋) / 不 ”を加え、“m是 (毋是 m3' - si7) / 不是”となることができる。
- ・ 一般動詞のように、肯定と否定を並列させた反復疑問文“是 m是 (是毋是 si7' -m3' - si7) / 是不是”という構成ができる。
- ・ さらに、“是 si7”の普段疑問文には、語尾に“是无 si7' -bo0”を用いるか直前に“敢 kann2”と結合し、“敢是 kann2' -si7”が用いられる。その上、否定疑問形では“敢 m是 kann2' -m3' -si7”という構成もできる。
- ・ 一般動詞のように存在と所在を表すことができる。“有 u7 / 在 chai7”の代わりに用いられる。

<一般動詞と異なる特徴>

- ・ 一般動詞のように文法動詞重ね型「主語+是是 si7' -si7+ 述語」という結合をすることができない。但し、回答・返事の形としては用いられる。
- ・ 一般動詞のように時態助詞「了 liau2・著 tloh8・過 koe3」と結合するができない。過去形では、“過 koe3”の代わりに“是 si7”の直前に時間副詞を加えなければならない。例えば、「“以前 i2' -cheng5” / 以前」とか「“本前 pun2' -cheng5” / 本来」などを用いる。
- ・ 一般動詞と違って、特に主語や述語を強調する場合、副詞と結合することができ、“才是 chiah4' -si7・就是 tion8' -si7”という構成で用いられる。また、原因や特殊・想定的状況を表す場合、接続詞と結合し“因為是・是因為・若是・但是”などの構成ができる。

その上、日本語の「のだ」構文に当たる用法では、台語・漢語では、「(“是 si7”+)(介詞句+) 動詞+ 目的語“的 e5” / (“是 si7”+)(介詞句+) 動詞+ “的 e5”+ 目的語」の形に

なり、すでに是の後ろに現われる実現済みの動作の主体・時間・場所・方式・目的などを強調する。その際に、“是 si7”は強調する要素の直前に置くが、省略することもできる。その故、“是 si7”が省略されても文が成り立ち、“是 si7”という動詞が文の主動詞として意味上の中心であるように働く効果がなくなる。従って、この場合“是 si7”はただ文の焦点を表すマーカ―としての役割だと考えられるのではなからうか。

日本語では、述語文の説明や現象文・新情報などを表すとき、助詞「は/が」を入れ替えると、焦点の表示が変わってくる。しかし漢語では「は/が」のどちらも繫辞文は“是 si7”にしか訳せない。繫辞文では、必要条件の副詞“才 chiah4”を加え<“才是 chiah4'- si7” / ~こそ>を用いて主語に焦点があることをあらわす。即ち、未知として提示して主語を強調焦点として表す。それに対して、“就 tion8”は充分条件として用い、<<“就是 tion8' -si7” / ~は~です>となる。“是 si7”の前の物事を既知のものとして提示し、その後に未知の事柄を説明する。この点でも、繫辞文とそうでない「是」構文が異なる。

2.1 先行研究

動詞は様々な観点から分類することができる。「是」に関する。先行研究を以下のようにまとめてみた。

戴耀晶(1995)は、動詞を静態と動態の二類に分ける。“是 si7”は静態動詞に含まれる属性という形態であり、主に属性関係を表す動詞だと定義する。

陳平(1998)は動詞の下位分類として“是”を Attribute だと定義する。すなわち“是 si7”は属性・性質を表す語と考える。これは前述の戴耀晶の動詞分類と意味がほぼ一致する。

鄭良偉(1992)は次のように主張する。

『“是”是特殊的動詞，形式上它是謂語的一部分，但實質上它不是謂語的主要部分，謂語的主要部分最常見的是名詞，其次是“的”字短語，也可以是動詞(單詞或短語)，以及其他形式。』(p.20)

『總的來說“是”字的基本作用是表示肯定。名詞謂語句裏經常用“是”字，因而肯定的意思就沖淡了，好像只有聯繫的作用了。名詞謂語句以外的句子，因為一般不需要用“是”字聯系主語和謂語，用了“是”字就突出他的肯定作用，也就是加強了語氣。(p.20~21)』

(日訳)“是 si7”は特殊な動詞で、形式上では述語の一部分であるが、述語の主な部分は常に名詞であるため、実際には“是 si7”は主要部分ではない。“的”字のフレーズで、動詞(単語あるいはフレーズ)にもできる。または、その他の形式でも用いられる。

総じて言えば“是 si7”字の基本的な役割は肯定を表すものである。名詞述語では常に

“是 si7”字が用いられるため、肯定的な意味が薄くなり、繫詞という役割になる。一般に名詞述語文以外のセンテンスでは、“是 si7”字は主語と述語との繋がりを必要としないので、“是 si7”字が用いられると最も肯定的な効果が生み出され、一層語気を強化するのである。（日本語訳は筆者による）

つまり、鄭氏は、“是 si7”は常に述語で表されるが、決して主要部分ではなく、よく“的”字のフレーズで他の形式として用いる。基本的に繫辞という役割であり、最も効果が生み出されるのは語気を強化したり肯定的な特殊動詞だと考えている。

呂叔湘（1999）の定義は以下である。

“是 si7”は動詞に属する。主に認定と結びつける機能を持ち、あわせて様々な関係を表せる。述語の主要部分は“是 si7”の後ろにある。否定には“不”のみを用いる。

以上の四人は、“是 si7”を動詞と認めるが、構文に応じて異なる機能、役割または性質をもつと考える。

筆者は“是 si7”を繫辞として用いるとき、一般動詞と違って、さまざまな機能を持ち、主に肯定、判断、説明、を下す特殊動詞だと考える。一方、繫辞でない“是 si7”は省略しても文は成り立つことができる。単に強調焦点のマーカ―として表す場合は、「人・人物・場所・時間・数量・程度・方法・性質・状態」等の性質を表せる代詞の機能と近いので、「強調代詞」として考えてもいいだろうと提案したい。

2.2 “是 si7”が繫辞として働く場合

“是 si7”を語法性質によって分類すれば、様々な用法がある。主語と述語が同等・分類・性質の従属関係を表す場合、場所・方位の存在を表す場合、動作・行為を強調的に説明する場合、推測・弁明・条件などの機能を表せる場合などである。

以下のようにそれぞれ“是 si7”と後続の品詞やフレーズ関係を具体的に検討し“是 si7”の用法や動詞としての機能を考察する。

2.2.1 “是 si7” + 名詞

2.2.2 “是 si7” + 接続詞 + 文 -

2.2.3 副詞 + “是 si7”

2.2.4 対比的な強調 - “是 si7 ~ 毋是 m7 ' -si7”

2.2.5 対・並列的な強調 - “A 是 si7A、B 是 si7B”

2.2.6 必要条件的な強調 - “才 chiah4”+“是 si7”

2.2.1 “是 si7” + 名詞

“是 si7” + 名詞の場合は以下の用例で示すように同等・分類・性質などを表す。

15) {Chheng1'-chhan5}-sian0-sinn0 {si7'-goa2'-e5' -jit8' -gi2' -lau7' -su1}.

{清田}先生 {是我的日語老師}。 < 清田先生は私の日本語の先生だ。 >

15a){Goa3' -e5' -jit8' -gi2' -lau1' -su1}{si7' -chheng1' -chhan5}-sian0-sinn0.

{我的日語老師} {是清田}先生。 < 私の日本語の先生は清田先生だ。 >

15b) {Chheng1' -chhan5} -sian0-sinn0 {si7}{goa2' -e5' -jit8' -gi2' -lau7' -su1}.

{清田}先生 {是}{我的日語老師}。

15c){Goa2' -e5' -jit8-gi2' -lau7' -su1} {si7}{chheng1' -chhan5}-sian0-sinn0.

{我的日語老師} {是}{清田}先生。

15)にある“是 si7”は等しいことを表す。即ち、主語と目的語が同一のものであることを表す。“是 si7”の前後をお互いに入れ替えることができる。入れ替えても 1) と 1a)は、意味も声調も変わらない。“清田先生”は特定の人物を指す人称名詞なので、単独の声調グループとなる。

しかし、15b)と 15c)のように“是 si7”が単独な声調グループになると、声調は変わらないが、焦点が変わってくる。15b)は「清田先生は私の日本語の先生だよ。」友達や恋人でもないと言明的にそのお互いの関係を強調する。15c)は「私の日本語の先生は清田先生だ。」村中先生や福田先生でもない特定の人物が指定されている。

16) {Goa2' -si7' -him5' -pun2' -tai7' -hak8}{e5' -hak8' -seng1}.

{我是熊本大學} {的學生}。 < 私は熊本大学の学生だ。 >

16)にある“是 si7”は分類を表す。“是 si7”の前後を入れ替えることはできない。単純な身分紹介であり、主語が目的語の群に所属するという説明である。“是 si7”は後続名詞と結合し、1つの声調グループとなる。

17) {Gou5}-sian0-sinn0 {si7' -ko1' -hiong5' -lang5}.

{吳}先生 {是高雄人}。 < 吳先生は高雄の人だ。 >

17)にある“是 si7”は特性・材料を表す役割である。“是 si7”は判断、説明を表す動詞であるが、後続の述語文と繋がり、変調する。“吳先生”とは特定の人を指す人称名詞なので、単独の声調グループとなる。

18) {Hak8'-hau7}{e5'-keh1'-pia4}{si7'-chhia1'-cham7}.

{學校} {的隔壁} {是車站}。 < 学校の隣は駅だ。 >

18) にある“是 si7”は存在（所在）を表す。即ち、話し手にとって場所は既知であり、既存、断定、状況などを説明する。

このように“是 si7”を用いて存在を表す構文では、主語は場所を表す語句である。目的語は存在する事物を表す。“是 si7”は“有 u”に近い表現である。“學校”は場所（方位詞）であり、単独な声調グループとなる。“的 e5”と“是 si7”も規則通りに、後続ものと結合し、変調して、1つの声調グループとなる。

19) {Chit1 ' () si7 ' -pin5 ' -ko2 } {he1 ' () si7 ' -lai5 ' } -a0 .

{這 () } 是蘋果 {He () } 是梨仔。

<これはリンゴで、それは梨だ。>

“是 si7”は前後2文の種類の違いを列挙的に説明する。つまり主語と目的語が同一関係と従属関係のいずれでもないものであることを表す。指示代名詞の場合にも、特にものの位置を強調する場合には、本調で発音し、1つの声調グループとなる。そうでなければ、常に後続のものと結合する。

19)のように疑問句として用いられるとき、後続の述語が省略される可能性がある。そこで「{這是} ~ / これは ~ }・「{He 是} ~ / それは ~ }」となり、「指示代名詞 + “是 si7”」の構成は、1つの声調グループになり、“是 si7”を本調で発音する。

2.2.2 “是 si7” + 接続詞 + 文 -

20) {I1 ' -bo5 ' -lai5 } {si7 ' -in1 ' -ui7 ' -() hak8 ' -hau7 } {u7 ' -tai7 ' -chi3 } .

{伊無來} {是因為 () } 學校 {有代誌}。

<彼が来なかったのは学校に用事があったのだ。>

21) {I1 ' () na7 ' -si7 () bo5 ' -lai5 } , {tion8 ' -si7 ' -hak8 ' -hau7 } {u7 ' -tai7 ' -chi3 } .

{伊 () } 若是 () 無來、{就是學校} {有代誌}。

<仮に彼がこなかったら、絶対学校に用事があった。>

接続詞である“因為 in1 ' -ui7”は“是 si7”の直前や直後に結合することができる。例 20)のように“是 si7”の直後に置かれ、語気が強くなり、事件の原因が一層強制的に説明されると考える。但し、この際、“因為”は単独な声調グループにはなれず、必ず“是 si7”と1つ声調グループとなる。他方、原因を明言しようかどうか迷う思考中の形で用いられたときは、語気がやや軽くなって、“是因為 si7 ' -in1 ' -ui7”の後ろで句切る必要がある。

例 21)のように、事件の発生原因をはっきり断定できず、あくまで現状を推測する形で用いられる場合、主語の“伊 I1”と接続詞“若是 na7 ' -si7”は句切られ、単独な声調グルー

ブとなる。この際、焦点は“若是 na7' -si7'”にあるが、語気が軽くなると考える。

一方、{伊若是無來}という1つ声調グループになる場合、後続の“就是 tion8' -si7'”があるからこそ、焦点は後ろの原因に当てられる。

2.2.3 副詞 + “是 si7'” + 名詞

22) {Tai7' -khai3'}{si7' -chit-giap8' -hoan2' -eng3'}.

{大概} {是職業反應}。 <まあ～それは職業反応だろう。>

22a) {Tai7' -khai3' -si7'}{chit-giap8' -hoan2' -eng3'}.

{大概是} {職業反應}。 <まあ～これは職業感覚だろう。>

22)の場合は、“是 si7'”の前に省略されている主語が話者自身か他者に限らず、後続行為だけが強調されている。

22a)の場合は、事情の変化や結果は恐らくそうだろうと推測している。この判断を下すのは話者である。

何れも、ある行動からその結果を推測する意を指す。“是 si7'”は単に後ろに表す行為に焦点を当てるマーカーとして用いられると考えられる。

23) {Kam2' -kong2'}{si7' -i({})thau1' -theh8}(e0).

{敢講} {是伊({})偷 theh} (的)。

<まさか彼が盗んだのではないだろう。>

23a) {Kam2' -kong2' -si7'}{i1({})thau1' -theh8}(e0).

{敢講是} {伊({})偷 theh} (的)。

<まさか彼が盗んだのではないだろう。>

例 23)は、状況や条件などを仮に推測する。

23)の場合は、副詞の「“敢講 Kam2' -kong2' / 難道 / 若しかして”」は“是 si7'”と句切りして、単独な声調グループとなることにより、盗まれたことは既知なことで、焦点である誰かについて合理的、確信的な推測で考えを述べている。

23a) {敢講是 kam2' -kong2' -si7'}の場合は、“是 si7'”は副詞の直後に結合され、1つ声調グループとなり、ものはどこかでなくなったか、盗まれたのかははっきり言えず、単純に状況や条件から「“伊 i1” / 彼」という人物がものを盗んだかもしれないという推測が表されている。

2.2.4 対比的な強調 - “是 si7'” + “毋是 m7' -si7'” - 弁明の気持ちを含む場合

24) {Chit1' -si7' -cho3-hi3'}{m7' -si7' -chin1}e0.

{這是做戲} {毋是真的}。 <これはお芝居であって、本当のことではない。 >

24a) {Chit1}{si7' -cho3' -hi3}{m7' -si7' -chin1}e0.

{這} {是做戲} {毋是真} 的。

24b) {Chit1' -si7' -cho3' -hi3}{m7' -si7}{chin1}e0.

{這是做戲} {毋是} {真} 的。

25) {Chit1' -si7' -bong2' -tong2}{m7' -si7' -iong2' -kam2}.

{這 ()} 是莽懂 {毋是 ()} 勇敢 。

<これは無謀というもので、勇敢ではない。 >

24)、25)のように“~是 si7~、毋是 m7' -si7~”という対比的な強調構文もよく用いられる。所謂、弁別の気持ちを含んで、客観的に実例を挙げ、“是 si7”の後続のものを対比的に比べ、論じられている。この構文では特に事件や状況・行為などの表したい焦点の違いにより、句切り点も変更することが可能である。だが、例のように“毋是 m7' -si7”(「~でない」)という否定詞の直後を一度句切り、自ら声調グループとなることにより、“毋是 m7' -si7”は変・本調で発音され、一層否定の語気が強くなる。そしてこれによって、文全体の否定が強動的に表現される。

2.2.5 対・並列的な強調 - “A 是 si7A、B 是 si7B”

“是 si7”の前後に同じ語句を用い、二つの事柄を同列に論ずることはできないことを表す。

26) {Goan2' -kol}{si7' -goan2' -kol}, {goa2(' -)} () si7' -goa2}, {nng7' -hoe5-su7}.

{阮哥} {是阮哥}, {我 ()} 是我}, {兩回事}。

<兄は兄、私は私で別だ。 >

27) {Thong1}{si7' -thong1}, {png7}{si7' -png7}. {mai-lam7' -lam7' -choe3-hoe2}.

{湯} {是湯}, {飯} {是飯}。 {mai 濫濫做夥}。

<スープはスープ、飯は飯で、混ぜたりしないで~ >

28) {Sin1' -toann7}{si7' -sin1' -toann7}, {gan2' -sin5}{si7' -gan2' -sin5}{chin1' -chiann3' -si7' -ho2' -ian2' -ki}.

{身段} {是身段}, {眼神} {是眼神}

{真正是好演技} 。

<目の表情といい、身のこなしといい~本当にすばらしい演技だ。 >

2.2.5 の例には、“是 si7”の前後に同じ語句を用いる。即ち、対にして用い、2つのものが異なり、一緒に論じられないことを強調する。特にどちらの語句が強調焦点として用いら

れても、“是”は単独な韻律語にならず、常に変調し、後続のものと結合され、1つの声調グループとなる。

2.2.6 必要条件的な強調

「“才 chiah4”」+“是 si7”を例に示す。

29) {Goa2' - chiah4' - si7' - lau7' - sul} .

{我才是老師}。 。

<私が先生であって、～ではない。>

29a) {Goa2}{ chiah4' - si7' - lau7' - sul} .

{我} {才是老師}。

<私こそ、先生であって、～ではない。>

30) {Chit1- pun2' - chheh4}{chiah4' - si7' - goa2' - sia2} e0 .

{這本冊}{才是我寫的}。 <この本こそ、私が書いたのだ。>

31) {An2' - na-choe3}{chiah4' - si7' - cheng3' - khak4} e0.

{按呢做}{才是正確的}。 <こういうやり方こそ、間違いなく正しいのだ。>

2.2.6 は事柄の真実性を強調するため、“是 si7”の前に、副詞が加えられる。しかし、例のように、強調的な副詞が加えられても、句切り点は副詞と“是 si7”の間には生じず、必ずその対象主語や述語の直後に移動する。又、対象主語が単独な声調グループになっても、ならなくても焦点は主語にあることがわかる。

“才 chiah4”は必要条件としての焦点を表す。すなわち“才是 chiah4' - si7”とするのは、断定の語気を一層強調するためであり、「～こそ～だよ / ～のほかはそうではない」の意味を含む。

日本語では、述語文の説明や現象文・新情報などを表すとき、助詞「は / が」を入れ替えることにより、焦点の表示が変わってくる。しかし漢語では「は / が」のどちらも“是”と訳すため、特に主語を強調する場合は副詞の“才 chiah4”を“才是 chiah4' - si7”とする構文でしか表せない。

相対的に述語をさらに強調したい場合は、副詞“就 tion8”を“是 si7”と結合し、“就是 tion8' - si7”とする構成ならば直後の述語説明が一層強調焦点として表せる。例えば、「我 才是 吳幸芬 / 私 が 吳幸芬です。」 「我 就是 吳幸芬 / 私 は 吳幸芬です。」

2.3 “是 si7”が本動詞以外の場合 -

“是 si7”は話し手が最も伝達したい部分を表すマーカーとして考えられる。すなわち焦点を表す時に強調する要素である話題（主語や述語にある対象、動作、行為、時間、場所など）または対比・限定などの構文で、既知の情報や新情報などを担う要素として直前に置くマーカーとして考える。このような強調構文の特徴は、“是 si7”を省略しても意味が変わらず、文は成り立つことができる。あれば一層、人物・時間・事柄などの真実性、情報が強制的に伝えられる。以下に“是”と動詞、形容詞、介詞、副詞、疑問句との後続フレーズとの接続構成から具体的な例をあげ、検討する。

2.3.1 “是 si7” + 動詞 + 結果補語

2.3.2 “是” + 動詞 + 目的語

2.3.3 “是”を動詞の直前に置くか、動詞の直前以外の場合

2.3.4 “是 si7” + ABB 型形容詞

2.3.5 “是 si7” + 名詞 / 動詞 + “的 e0” - 事柄の真実性を強調する

2.3.6 “是 si7” + 介詞 + 名詞 / 動詞 + (“的 e0”)

- 介詞“佇 ti1”、“及 kap1”を用いる場合

2.3.7 “是 si7” ~ “抑是 iah8’(3)-si7”— 選択疑問文 [“抑是” / それとも]

2.3.8 “是 si7” ~ 的 e5”— 疑問詞焦点文 - [“啥人” / 誰・“tang 時” / いつ]

2.3.1 “是 si7” + 動詞 + 結果補語

32) {Cha4 ’ -hng1} {si7 ’ -lim1 ’ -kap1 ’ -chui3 ’ -bong5 ’ -bong5}.

{昨昏} {(是)lim 甲醉茫茫}。 <昨日は結構酔っ払うほど飲んでいて>

33) {Be7 ’ -khi3}, {m7 ’ -khi3} {(si7 ’) -kong2 ’ -ho2 } -boe0?.

{Bē 去}, {毋去} {(是)講好} boē?。 <行くか行かないか、もう決まった？>

32)は主に「“lim” / 飲む」と「“醉茫茫” / 酔っ払う」という二つの行為を示す。“是 si7”の有無により話者の叙述焦点が変わる。“是 si7”がある場合は、前半の「“lim 甲” / 結構飲んだ」という経過行為(単に飲んでいただけではなく、結構飲んだということ)を強調する。なければ、後半の結果行為(結果補語 - “醉茫茫 chui3 ’ -bong5 ’ -bong5” / ぶらぶらに意識不明なぐらい酔っ払っていた)に焦点があると考えられる。

33)は「行くか行かないか？もう決まった？」と話し手がもどかしい様子で、相手と第三者の話し合った答えを伺っている。“是 si7”を省略しても意味が変わらない。焦点は主に「講好 boē?」という動補述語関係で果たしている。しかし“是 si7”があれば、「一体 ~ / もう ~ 」と言う気持ちの強制的な意味が取れる。つまりこの例の“是 si7”は後続の行動の強調焦点マ

ーカーとして用いられていると考える。

2.3.2 “是 si7” + 動詞 + 目的語

(“是” + 動詞 + 目的語) - 説明する。

34) {Cha4 ' -am3 } { i1 ' - si7 ' -chiah8 ' -chui2 ' -kiau2 }.

{昨暗} {伊 (是) 食水餃}。 < 昨晚彼は餃子を食べたんだ。 >

“是”を強く発音すると動作・行為を強制的に説明しながら、「確かにその通りだ」という意味を添える。“是”は省略されても声調グループの変化がない。

*(動詞 + “是” + 目的語)

34a) {Cha4 ' -am3 } { i1 ' - chiah8 ' - si7 ' - chui2 ' -kiau2 }.

*{昨暗} {伊食是水餃}。 < 昨晚 彼は餃子を食べた。 >

このような語順は成立しない。“是 si7”は動詞の後ろに付けられない。

(動詞 + “的” + 目的語) - 説明をする。弁別の気持ちを含むことがある。

34b) {Cha4 ' -am3 } { i1 ' -chiah8 }e0, { si7 ' -chui2 ' -kiau2 }.

{昨暗} {伊食} 的 {是水餃}。 < 昨晚彼が食べたのは餃子だ。 >

目的語を強調するように、他のものではなく、確かにそのものだという意図を表す。34b) は「～が～のは～だ」という構文なので、“是 si7”は繫辞として用いられていて省略できない。

2.3.3 “是”を動詞の直前に置くか、動詞の直前以外の場合

35) {Ong5 }-sian0-sinn0 { (si7 ')che7 ')-sin1 ' -kan3 ' -soann3 } {tui3 ' -kol ' -hiong5 } {lai5 }e0.

{王}先生 { (是) 坐新幹線} {對高雄} {來}的。

< 王さんは新幹線で、高雄から来たのだ。 >

35a) {Ong5 }-sian0-sinn0 { (si7 ')tui3 ' -kol ' -hiong5 } { che7 ')-sin1 ' -kan3 ' -soann3 } {lai5 }e0.

{王}先生 { (是) 對高雄} {坐新幹線} {來}的。

< 王さんは高雄から新幹線で来たのだ。 >

35b) {Che7 ')-sin1 ' -kan3 ' -soann3 } {tui3 ' -kol ' -hiong5 } {lai5 }e0 { si7 ' -Ong5 }-sian0-sinn0.

{坐新幹線} {對高雄} {來}的, {是王}先生。

< 新幹線で高雄から来たのは王さんだ。 >

35c) { (Si7 ')ong5 }-sian0-sinn0 {che7 ')-sin1 ' -kan3 ' -soann3 } {tui3 ' -kol ' -hiong5 } {lai5 }e0.

{ (是) 王}先生 {坐新幹線} {對高雄} {來}的。

< 王さんが新幹線で高雄から来たのだ。 >

“坐 Che7”が表す意味は、日本語では手段を表す格助詞となるが、台語では、動詞となり

「(乗り物に)乗る」の意味を表す。この場合も声調は常に変調し、後続の述語の道具や方法と結合し、1つの声調グループになる。

35)例は、同じ文の語順を変えてみたのだが、本来分割されている韻律語の構造も内部の声調も変わらないことがわかる。“是 si7”が省略される場合は、焦点が明確でないので、単なる知らせや、説明的な叙述文になると考える。この際は声調グループの変化もない。“是 si7”がある場合は、はっきりと焦点が表されるので、語気上での強弱の違いがあると考えられる。

しかし各例は、“是 si7”という焦点マーカの提起により後続の焦点がそれぞれ変わってくる。35)は手段(乗りもの) 35a)は始終点の場所、35b)は対象のほうに焦点を表すと考えられる。又、各構文は、“是 si7”を二箇所に使うことができない。

さらに、35b)と 35c)は、ただ焦点を表す要素の対象を文頭と文末の入れ替えるだけで、意味は全く変わらない。しかし用いられる文型は「～のは～だ」と「～が～のだ」の違う分裂文である。

その上、35b)の“是 si7”は省略できないので、このような構文では、“是 si7”が繫辞として働く。要するに、上述した 34)と 35)例では、同じ文の並びにフレーズ順番が変えたことにより、34b)と 35b)のような文型が変わってしまう。本来ならば日本語の「～だ/のだ」という構文と対応するはずだが、「～のは～だ」になったので、変換位置が同一文型を成さない。声調グループの変化がないが“是 si7”の働き方が変わることが分かる。

2.3.4 “是 si7” + ABB 型形容詞

36) {Chheng7' -kahl' -Hit nia2' -sann}{si7' -ang5' -gi3' -gi3}.

{穿甲 Hit 領衫} { (是)紅 gigi} ~ ({敢會看}e).

< 着ている服はあんなに真っ赤だよ。あんな真っ赤な服を着て見られるもんか。 >

37) {Chu2' -kap4' -chit1' -chhai3} {si1' -kiam5' -tok4' -tok4}{beh4' -an1' -choann2' -chiah8}.

{煮甲這菜} { (是)鹹篤篤} ~ (((是)beh 安怎食}) .

< こんな料理は塩辛いんだよ。 / こんな塩辛い料理を作ってどうやって食べるの。 >

“是 si7”に後続する形容詞が単音節であれば、語尾に付加詞“的”を付けなければならない。この際、述語を名詞化し “是 si7”が繫辞として働く。しかし“是 si7”が単にものの状態、様態、性質などを強調する焦点マーカとして用いられる場合、“是”の後続形容詞は 3音節の ABB 型形容詞か AAA 型形容詞しか付加されない。また最後の結語を省略しても

文が成り立つことができる。

「ABB - “紅 gigi” / AAA - “紅紅紅”」, 「ABB - “鹹篤篤” / AAA - “鹹鹹鹹”」

36)は、単に普通の赤い服を着ているのではなく、真っ赤な服だよ～と 37)は、ほんの少ししょっぱいだけではなく、飲み込めないほどものすごくしょっぱいと強調されている。

2.3.5 “是 si7” + 名詞 / 動詞 + “的 e0” - 事柄の真实性を強調する

38) {Si7' -u7' -lang5' -chhut4' -siann1'}, {goa2' -u7' -thiann1' -tioh8'}.

{(是)有人出聲}, {我有聽到}。

<誰か声を出したの。私はちゃんと聞こえたよ。>

39) {(Si7')kin2' -a2}{ ai3' -chiah8}e0.

{(是)囡仔}{愛食}的。 <子供の好きな食べものだ。>

40) {I1' -(si7')che7' hui1' -ki1}{ lai5 }e0.

{伊(是)坐飛機}{來}的。 <彼は飛行機で来たのだ。>

2.3.5 の例文では、“是 si7”は焦点を当てる要素の前に置かれるが、省略しても意味が変わらない。あれば一層、人物・時間・事柄などの真实性を強調できる。何れも既に実現したことを前提として、焦点を当てて述べる形式である。基本的に 28)以外の例文は無主語文だと言い、文の全てを述語文として考える。又、指示性の主語が“是 si7”の前に置かれても成立する。但し原則として、“是 si7”の前に主語がない場合、必ず変調し、句切りをせずに後続のものと結合しなければならない。一方、動詞が目的語を伴う場合、“的 e5”は原則として動詞の直後に置かれ、軽声で発音する。

2.3.6 “是 si7” + 介詞 + 名詞 / 動詞 + (“的 e0”) - 介詞“佇 ti1”、“及 kap1”を用いる場合

41) {Lian7' -sip8}{ }e5' -sou2' -chai7}{ si7' -ti7' -kong1' -hng5}.

{練習 (){ } 的所在} {(是)佇 (){ } 公園}。

<練習の場所は公園だ。>

42) {Hit4' -tiau5' -khou3}{ si7' -ti1' (){ } to2' -ui7' -be2}e0.

{Hit 條褲} {(是)佇 (){ } 叨位買} 的? <“叨位” / どこ>

<あのズボンはどこで買ったの? / あのズボンはどこで買ったのかな(思考中)?>

本来介詞は常に変調し、後続のものと結合し、1つの声調グループとなるものであるが、“是 si7”と結合し、場所や原因などを強制的に説明する。又は、言うか言わないか迷うときや一所懸命考えて思考中の形で用いられたとき等の語気は句切る必要がある。従って、41) 42) “是佇 si7' -ti1”のように単独な声調グループになる可能性がある。句切る場合に“是 si7”は変調のままで変わらないが、介詞は本調で発音する。

43) {A1' -hoa5}{si7' -kap1' -a1' -giok8}{cho3' -hoe2' -khi3}e0.

{阿華} { (是)及阿玉} {做夥去} 的。

<華ちゃんは玉ちゃんと一緒に行ったのだ。>

43a) {A1' -hoa5}{kap1' -a1' -giok8}{si7' -cho3' -hoe2' -khi3}e0.

{阿華} {及阿玉} {(是)做夥去} 的。

<華ちゃんと玉ちゃん是一緒に行ったのだ。>

43b) {A1' -hoa5}{kap1' -a1' -giok8}{long2' -si7' (}{}) ka1' -ki7' -khi3}e0.

{阿華} {及阿玉} {攏(是) (}{})家己去} 的。

<華ちゃんと玉ちゃんとは皆(二人とも)自分で行ったのだ。>

43) の場合、“是 si7”は介詞の前や後ろに置くことができるが、その場合焦点が当たる部分が異なる。43)の焦点は同行者“阿玉 a1' -giok8”であり、43a)は両者が同行したことを強調する。しかし、43b)のように肯定的な並列の説明文では、「攏 long2”/全て/皆(二人とも)」を強調するとき、“是 si7”は“攏 long2”の後ろにしか置けない。又、「皆」や「自分で」のどちらかを焦点として表す場合にも、後続名詞と句切るか否かも自由だと考えられる。

2.3.7“是 si7”～ “抑是 iah8'(3)-si7” — 選択疑問文 [“抑是”/それとも]

44) {li2' -(si7')khi3' -pak4' -keng1}{iah8'(3)-si7' (}{}) khi3' -siong7' -hai2}.

{妳(是)去北京} {抑是 (}{})去上海}。

<あなたは北京に行ったの、それとも上海に行ったのだ。>

45) {li2' -(si7')be4' chiah8'(3)-png7}{iah8'(3)-si7' (}{})(be4')chiah8'(3)-mi7}.

{妳(是)be 食飯} {抑是 (}{})(be)食麵}。

<あなたはご飯を食べるの、それともラーメンを食べるのだ。>

条件や項目を並列している選択疑問文では、前の“是 si7”を省略することができる。意味は変わらない。このような選択を求める要素は、原則として動詞句でなければならない。声調の変化は規則通りであるが、語気重心は目的語だと考えられる。副詞の“抑是 iah8'(3)-si7”は単独な声調グループになってもよい。即ち、相手に確認してもらい、考えさせる時間を与えるためである。

2.3.8“是 si7”～ 的 e5” — 疑問詞焦点文 - [“啥人”/誰・“tang 時”/いつ]

46) {Si7' -siann2' -lang5' -choe3}e0

{(是)啥人做}的?

<誰がやったのか?>

46a) {Si7' -siann2' -lang5}{choe3}e0.

{(是) 啥人} {做} 的?

46b) {Si7}{siann2' -lang5-choe3} e0.

{(是)} {啥人做} 的?

46c) {Si7}{siann2' -lang5}{choe3' -e5}.

{(是)} {啥人} {做的}?

例文 46)から 46c)の順で語気が徐々に強くなる。特に 46c)の場合は疑う気持ちが高まり「一体これは誰がやったの」と怒りながら確認しているような言い方だと考える。

47) {Si7' -tang1' -si5' -hoat4' -seng1} e0?

{(是) tang 時發生} 的? <いつ起きた事? >

47a) {Si7' -tang1' -si5}{hoat4' -seng1' -e5}?

{(是)tang 時} {發生的} 的? <いつ起きた事? >

47)は一般的な疑問の言い方であるが、47a)の場合は驚くように、語気がより強くなり事情を詳しく聞き取りしている句切り方だと考えられる。

3. “是 si7 ~ 的 e5”構文について

“是 si7 ~ 的 e5”構文とは、主語を既知や前提情報として考え、後続の述語文を強制的に説明や判断して新しい情報をもたらす構文である。又、“是 si7”の後に動詞か形容詞が続く場合、動詞や形容詞の直後に“的 e5”という付加詞を条件として付けねばならない。その役割は動詞や形容詞を名詞化する働きである。

“是 si7 ~ 的 e5”構文は文中の意味の情報焦点を一般的または、対比的な 2 種類に分けて説明したり、ある意味の感受や語気を表したりする構文だと考えられる。文の構造は、主に〔主語と述語句〕、〔動詞述語句〕、〔形容詞述語句〕ということになる。

次に、“是 si7 ~ 的 e5”構文が文中の情報焦点として用いられた際の声調の変化または語気を表す時のピッチパターンの違いを考察してみる。

3.1 “是 si7 ~ 的 e5”構文の肯定的な判断や説明 -

“是 si7”は常に変調して、後続の述語焦点と結合する。“的 e5”は先行のものとの間に常に句切りする。

48) {Chit4' -oann2' -thong1}{si7' -sio1} e0.

{這碗湯} {是燒} 的。 <このスープは熱いのだ。 >

49) {Goa2' -si7' -chal' -hng1}{lai5} e0.

- {我是昨昏} {來}的。 <私は昨日来たのだ。 >
- 50) {I1 ' -si7 ' -pi7 ' -chhia1 } {long3} si0-e0.
 {伊是被車} {撞} 死的。 <彼は車にぶつかって死んだのだ。 >
- 51) {I1 ' -si7 ' -chiok4 ' -lau2 ' -sit8} e0.
 {伊是足老實} 的。 <彼は大変真面目なのだ。 >
- 52) {Hit1 ' -ki1 ' -ian5 ' -pit4} {si1 ' -lau1 ' -su1} {e5}.
 {彼枝鉛筆} {是老師} 的。 <あの鉛筆は先生のだ。 >

“是 si7 ~ 的 e5”構では、焦点は常に“是 si7”の後ろにある述語に表されている。“的 e5”は肯定的な判断で前後呼応している。又、“是 si7”は XP の XP が焦点であることを示すマーカーとして用いられるので、声調は常に変調し、後続のものと結合して、1 つの声調グループとなる。その上、強調されている形容詞や動詞という焦点を本調で発音する。その後に加されている“的 e5”に後続のものがなければ、声調は常に弱化されているので、軽声で発音する。しかし 52 は、所有の意味を表すので本調であり、繫辞文である。

3.2 対比的な説明・強調 - “是 si7 ~ 的 e5” + 否定詞“毋是 m7 ' -si7 ~ 的 e5”

3.2.1 述語が名詞の場合

- 53) {Hit1 ' -pun2 ' -chheh4} {si7 ' -hak8 ' -hau7} {e5}, {m7 ' -si7 ' -goa2 ' -e5}.
 {Hit 本冊} {是學校} {的} {毋是我的}。
 <あの本は学校のもので、私のものではない。 >

“的 e5”は人称代名詞の後だけではなく、普通名詞の後に付加されても、所属関係を表すので、本調で発音しなければならない。

3.2.2 述語が動詞の場合

- 54) {Mng2 ' -tun3} {si7 ' -ka1 ' -ki7 ' -chu2} e0, {m7 ' -si7 ' -khi3 ' -boe2} e0.
 {晚頓} {是家己煮} 的, {毋是去買} 的。
 <晩御飯は自分で作ったが、買ったものではないのだ。 >

例 54)は、強調されている動詞の後に“的 e5”という付加詞をつけ、動詞句を名詞化し、“是 ~ 的”構文の否定形となる。2 つの動作が対比的に本調で強調され、“的 e5”が弱化され軽声で発音する。主にこの表現は、すでに完了した動作の結果の説明を行うのである。

しかし、動詞句の後に“的 e5”を省いた場合は、「{晚頓} {是} {家己煮}、{毋是去買}」となる。“是 si7”が単独な声調グループとなって、強調されているのは未来の出来事についての命令と禁止の指示だと考えられる。

3.2.3 述語が形容詞の場合

55) {I1' -si7' -khong1} (e0), {m7' -si7' -gong7} (e0) .

{伊是空} (的), {毋是戇} (的)。 [“戇”/ばか]

<彼はばかではないが、いい加減にしているだけだ。>

形容詞の前に述語動詞“是 si7”を付けることにより、形容詞“空 khong1”・“戇 gong7”が目的語になる。前後の目的語を強制的に対比する。前者は名詞の修飾語として用いられ、後者は文の述語となる。

このように特殊強調または、対比の文においては、簡単な形容詞の後ろの“的 e5”を省略することもできる。

3.2.4 “是 si7 ~ 的 e5”構文の否定疑問 — “是毋是 / 敢 m 是 / 是 bo / 毋是 ~ 嘛?”

56) {Si7' -m7' - si7' -li2' -kang2}e0?

{是毋是妳講} 的? <あんたが言ったのか?>

56a) {(Si7' -)li2' -kang2}e0, {si7' -m7' - si7}?

{(是)你講} 的, {是毋是}? <あんたが言っただろう?>

56b) {(Si7' -)li2' -kang2}e0, {si7}{m7' - si7}?

{(是)你講} 的, {是}{毋是}?

<あんたが言っただろう。それとも違うというの?>

例 56) →56a) →56b) の順に事実に対する疑う気持ちやそう確信したい語気の変化が大きくなる。その上、56a) と 56b) では“是”が省略されているが、“是 si7”があると、一層話者の主観表現が深くなると考える。

57) {Kiam2' -m si7' - li2' -kang2}-e0.

{敢 m 是你講} 的? <あんたが言ったじゃないの?>

57a) {(Si7' -)li2' -kang2}-e0, {kiam2' -m7' -si7}?

{(是)你講} 的, {敢 m 是}? <あんたが言ったのだよ。違う?>

“敢 Kiam2”は台語では常に疑問詞の前に付加され、疑問副詞として用いられる。自分の判断に評価や同意を求めるために使う。声調が変調し、語気も普段の疑問詞より高く強く発音する。57) より 57a) のほうが自分の意見に対する確信が強い。

58) {M7' - si7' -li2' -kang2}e0-ma0.

{毋是你講} 的嘛? <あなたが言ったじゃないの?>

58a) {(Si7')li2' -kang2}e0, {m7' - si7' -}ma0?

{(是)你講} 的, {m 是}嘛? <あんたが言っただよ。違う?>

例 58) と 57) はほぼ同じ使い方である。しかし、語気上では 57) のほうがやや強いと考える。

59) {Li2 ' -kang2}e0, {si7} bo0? / {simq4}.

{你講} 的, {是}bo? (simq4).

<あなたが言ったでしょう? >

例 59) は一般的な疑問句だと考えられる。

60) {Li2 ' -kang2}e0, {tioh8- bo0} .

{你講} 的, 著無?

<あなたが言ったでしょう? >

61) {Li2 ' -kang2}e0, {tioh8- m0} .

{你講} 的, 著毋?

<あなたが言ったでしょう? >

「“是 bo{si7} bo0” “著無{tioh8- bo0}” “著毋{tioh8- m0}”」は意味が似ている疑う時の疑問文である。どれも推測形で、相手に再確認するため、返事を求めている聞き方である。

3.2.5 “是 si7 ~ 的 e5”構文の再確認 -

接続副詞 + “是” — 若是 Na7 ' -si7 / 敢是 Kann2 ' -si7 / 攏是 Long2 ' - si7 / 著是 Tioh8 ' -si7 / 也是 Ia7 ' -si7

62) {Na7 ' -si7 ' li2 ' kang2}e0 .

{若是你講} 的。

<あなたがもし言ったならば ~ >

63) {Kann2 ' -si7 ' li2 ' -kang2}e0 .

{敢是你講} 的。

<あんたが言ったの。 >

64) {Long2 ' - si7 ' li2 ' - kang2}e0 .

{攏是你講} 的。

<みんな / すべてあんたが言ったのだ。 >

65) {Tioh8 ' -si7 ' li2 ' -kang2}e0 .

{著是你講} 的。

<きっとあんたが言ったのだ。 >

66) {Ia7 ' -si7 ' li2 ' -kang2}e0.

{也是你講} 的。

<それともあんたが言ったの。 >

副詞は常に動詞、形容詞又は他の副詞の修飾語として用いられる。§3.2.5 では本来の“是 si7 ~ 的 e5”構文に「あなたが言ったのだ。」という文と接続副詞を付加するとそれなりの断定の強弱とニュアンスが変わってくるのがわかる。即ち、“是 si7”と結合されている“若 Na7”、“敢 Kann2”、“也 Ia7”は疑問副詞として、話者の肯定的な判断を一層同意するように相手に促す文となる。“攏 Long2”、“著 Tioh8”、は話者が断定、確信した上で、相手の過失を指摘する文となる。

しかし、どちらにしても“是 si7”の声調は変わらずに後続のものと結合され、1つ声調グ

ループとなる。

4. 小結

“是 si7”は繫辞の用法だけでなく、情報焦点のマーカーとして働く機能も持つと考えたので、本稿では特に“是 si7”を中心に、2つの機能について分析した。結果として以下のことが判った。

1、“是 si7”が繫辞として働く場合、主に主語句と目的語句の繫辞として用いられる。即ち、述部を形成する節と共起し、主語句と目的語句が等しい関係を表したり、分類、材料、帰属、存在などの従属関係を表したりしている特殊動詞だと考える。“是 si7”の直前に副詞を添えた場合、より一層強調的な表現ができる。

2、一方“是 si7”を構文中に省略しても文が成り立つことが可能な場合は、“是 si7”は単なる文の焦点を表すためのマーカーだと考える。このような役割は代詞の性質と近いので、品詞分類では一種の「強調代詞」として考えてもいいだろうと提案したい。

つまり、このような構文では、“是”がある場合、特に“是 si7”の直後に時間・場所・手段がくる場合はその時間・場所・手段を強調できる。特に、“是 si7 ~ 的 e5”強調構文が一番典型的だと考える。そのほか、目的語が「日付・曜日・年齢・出身地・天候・値段」などの時には、“是 si7”は省略できる。

動詞の場合も強調代詞の場合も、通常は“是 si7”は先行の(代名詞や)副詞、後続の目的語句/焦点句と声調グループを形成する。焦点句の場合は、“是 si7”がなくても同じ声調グループになる。さらに強調すると、動詞の場合も強調代詞の場合も、“是 si7”と後続の目的語が二つの声調グループに分かれることがある。発音については動詞の場合と強調代詞の場合で大きな違いはない。

5. 参考文献

- 相原茂 2002 『中日辞典』第二版 講談社
- 千島英一 2007 『広東語動詞研究』東方書店
- 鳥井克之 2008 『中国語教学(教育・学習)文法辞典』東方書店
- 村上嘉英 2007 『東方台湾語辞典』東方書店
- 林 璋 佐々木勳人 徐萍飛 2002 『東南方言比較文法研究』好文出版
- 呂叔湘 2003 牛島徳次・菱昭透 監訳 『中国語文法用例辞典』東方書店
- 小泉保 2007 『日本語の格と文型』大修館書店

- 盧廣誠 2003 『台灣閩南詞彙研究』 南天出版社
- 楊秀芳 2007 『台灣閩南語語法稿』 大安出版社
- 鄭良偉 1992 『國語常用虛詞及其台語對應詞釋例』 遠流出版社
- 鄭良偉 1997 『台、華語的接觸與同義語的互動』 遠流出版社